



Article title: 支那の動亂と三井物産の三人男
 Author: Sarumen kaja 猿面冠者
 Journal Title: Jitsugyo no Nihon 實業之日本
 Publisher: Jitsugyo no Nihonsha 實業之日本社
 Year: 1911
 Volume: 14
 Number: 23
 Page: 30-32

猿面冠者とは目下病を得て静養しつつある某少壯實業家なり

支那動亂の中心地に於ける三井物産

記者足下、支那の動亂は、地を捲き、砂を捲き、波を捲て、遂に此山中の病客までも東京に歸るべく餘儀なくせしめた、君等には定めし面白き對岸の火災であらう。併し僕の如き、今は直接ならずとも支那貿易にいさゝかながら關係を有する者には隣家の火事だよ。尤も今の所では別に大した用事もないがね。

動亂の發展次第で最も影響の大なるものは三井物産であらう。動亂の中心地たる漢口は三井物産が最も望を属する所で、久しく上海支店の管轄に屬して居たが、近年愈々獨立の支店となつて、大に雄飛する準備をして居たのだが、今の處先づいくさ見物より仕方はあるまい。支店長は丹羽義次とかいつて、僕が先年支那に遊んだ時上海の物産支店に居たさうだ、會つたことはないが、まだ若い男で、例の高商出身十二年間も上海に居て、山本、藤瀬といふ兩豪傑の下で叩き上げた少壯氣鋭の勇者であるさうな。

三井物産は豪傑揃ひの梁山泊

僕は今回の動亂で当年の支那行を思ひ出し、而して又更に三井物産の支那探題藤瀬治次郎を思ひ出すよ。世亂れて英雄出づて、藤瀬が如何に此風雲と支那貿易の關係を睨んで居るか、一寸注目の價がある。

僕の見るところでは今日の三井物産位多く豪傑を網羅して居る所はあるまい。試に指を屈すれば先ず重役の山本条太郎、次で上海の藤瀬政治郎、大阪の藤野龜乃助、倫敦の磯村豊太郎、北海道の藤原銀治郎、此等の面々は、皆腕も口も酒も、三拍子揃つた剛の者だよ。今日の實業界を戰國の時代になぞらへて人物の役割を並べて見ると、差向き 嶽の七本槍は此等の連中に持つて來なくちやなるまい。益田孝君の言ふ事でも、中々ハイタタといつて黙つて聽いて居る連中ではないのだ、それをどういふ呼吸か、巧く操縦して行く飯田義一も亦一種の人傑というはざるを得ない。僕の友人は彼れを評して『猛獸遣ひ』と言つたが、全くだ。とぼけた様な風をして居るが、飯田もえらいよ。

僕は山本条太郎の此點に感心した

僕が上海に行つた頃は、山本は既に日本へ歸つた後で、藤瀬が其跡釜に据つて新に支那探題となつて居た時であつた。當時山本の支那に於ける評判は實に大したもの、三井物産の支那に於ける勢力發展は山本が一人で遣付けた様に言ひ觸らして居た。それは、兎に角僕が一寸往つて見て感心したのは、彼れが上海在任中に、支那の大舞臺で、縦横に働ける若手の腕利を多く作り上げた事だ。世間では唯山本が機敏だ、快腕だとかいつて感心して居るが、そりや凡眼の見る所サ。ナポレオンの値打のある處は、土偶を化して兵士となし兵士を化して將校となし、將校を化して名將とした點に在るとはよく史家の言ふ所じやないか。山本も亦さうだ。彼の人人を使ふや、叱咤先ず到り鞭撻次で下る、なかなか激しいが、焉んぞ知らん部下はそれで訓練されるのだ。上海には、山本に訓練された若手のチャキチャキが今でも澤山居るよ、丹羽なども其一人だ何といつても山本は三井のナポレオンであらう、實業之日本でも山本の事をよく書く様だが、こんな點を書いた事があるかね。

支那探題 藤瀬政次郎の風采

足下僕は一寸用があつて、藤瀬に會ふ積で、物産の支店に行つた。丁度新築の普請が立派に出來上つた時で、立派な應接間で待つて居ると藤瀬の奴、自動車で王侯氣取りに遣つて來た。山本は知つて居たが藤瀬には初めて會つたのだ。威風堂々といつてよからう、成程之ならば山本の跡に据つて支那の探題となるには相應はしき風采だと、僕は心から嬉しく思つたよ。君、海外に出て、瘦せぼけた丈の短かい風采の揚らない日本人を見ると、僕は何だか厭な氣がするね。

山本藤瀬兩人の面白きコントラスト

會ふまでは僕も藤瀬を山本の様な精悍なレストレスな男だと想像して居た。會つて見ると、山本とは正反對だ、威風の堂々たる處は兩者ともに三井の双壁であるが其威風の趣が全く違ふ。山本は色の淺黒い、肉の締つた、俊鷹の如き態度であるが、藤瀬は眉目清秀の美丈夫だ。山本は誰が見ても活動の典型、常に電光の如き眼を光らして、餌を求むる虎の如く、いつも疾風迅雷的で、頭もからだも會えて休止する所なしといふ恰好だが、藤瀬はどつしりとして動かざる山の如く、極めて莊重な態度で、人に接しても仕事に當たつても從容として迫らぬ趣がある。山本は精悍の氣眉目に溢れて、平氣な話を居ても満身の筋肉緊張して、人を壓する風があるが、藤瀬は鋒鋦を裏むで、低い聲で穩かに話をする。君等の中にも兩人に會つた者もあらう、よく注意して見給へ、此コントラストは餘程面白いよ。

兩人の強情と、意思と、意地張り

併し兩人共強情で意思が強くて、寧ろ意地張で、こうと思つたら梃子でも棒でも頑として動かない處は餘程よく似て居る。山本の強情は有名なものだ、彼れが尚物産の小僧をして居る時、課長から人に送る手紙を托されて、落した事があつたさうだ。其手紙が課長の手にはいつて、落した事が知れて忽ち課長に呼付けられた。課長は手紙はどうしたと詰つた。山本はたしかに届けたと答へた。すると課長は烈火の如くに怒つて、其手紙を山本の前へ叩き付けて、貴様是でも届けたといふかと噛み付きさうに責め懸けた。大抵の小僧ならふるえ上つて恐れ入つて仕舞うのだが、山本はびくともしない、昂然として、手紙は亡くしたが用事はとつくに先方へ達して居る。手紙などは反古に過ぎないと言ひ切つたので、課長も其膽力と強情とに舌を巻たといふ事である。藤瀬も斯ういふ風の強情男だ、自分が一たび斯うと思つたら、益田總理の言ふ事でも誰れの言ふ事でも頑として聽かない。

益田君の命令に少しでも不條理と思ふ事があると、そりや三井の益田としてのお話か、個人の益田としてのお話かなどと突込んで、尻を据えて動かない處を芝居にでもしたら『イヨー高島屋一』と大向ふから聲のかかる處だ。ねー、君、さうじゃないか。

好いたらしい男だがウキスキーはご用心

足下、此兩人は兎に角東洋の大舞臺で活動するにはお詔向の人物だ。彼等は傲慢に見える所もあるかも知れぬが、兎に角上長の鼻息を窺つたり、臺所から這入り込んだり、奥の御機嫌を伺つたりする处世法によらないで、正々堂々、論ずべきは論じ、主張すべきは飽くまでも主張していつでも男らしい態度を失はないのは、好いたらしい男だ。彼等は年輩に於ても伯仲の間にある様だ、山本は重役になつたが藤瀬はまだ支店長で居る。順番の都合もあるだらうが、こんな氣象だから進歩は遅いサ、併しそんな事は構うことはない。僕は彼等に向けて言てやりたい『汝の腕を頼め』と而して更にモー一つ言つてやりたい。兩人の自愛を望むが爲に兩人共に少しウキスキーを用心したらよからう。山本は昨年の病氣以来少し慎んで居るといふ事だが、藤瀬は相變らず飲む様だ。今頃は動亂の風雲を睨んで、ウキスキーの瓶を前に陳列べて、萬丈の氣焰を吐いて居るだらう。其元氣と精力は感服だがアル中だけは友人中にも大分心配して居る者もあるから僕からいつて置く、ゆめ病人の老婆心と思ひ給ふな。

山本の眞價茲に在り

足下、今日では物産の大立物はどうしても山本であらう。彼の膽力は無双である。併し世人は唯彼れの大膽のみを見て彼れの小心を知らぬ。彼れの小心も亦無双であることを知らぬ。大膽にして小心、是彼れが巨人の如くに闊歩して居る所以である。

飯田義一は外、不得要領の如くに見えて、内は極めて綿密な男ださうだ。その飯田が念入りに調べた調査を山本はそれでもまだ安心がならぬと見えて更に又深く調査するといふだけでも山本の小心さ加減が想ひ遣られるではないか。普通の男がモー大抵此位でよからうといふ程度は、山本には漸く薄皮を剥いた位のもので、彼れは其の上更に身を剥いて核まで極めて見なければ承知が出来ぬといふ質だ。それまで周密に取調べる眼光と精力とを持って居る者は一寸ないが、斯くして有望と決定したら直に買占に懸る大胆さも亦一寸彼に及ぶ者はあるまい。彼れは豪傑ではあるが東洋流の粗枝大葉式の豪傑ではない。

歸つて來るとすぐ人が尋ねて來て、實にうるさいね、蘇東坡は、病氣大明神だといつたさうだが。全くだよ。此處まで書くと又遣つて來た。これから面白い男が出るが又今晚の事にしやう。(つづく)



Article title: 支那の動亂と三井物産の三人男 (二)
 Author: Sarumen kaja 猿面冠者
 Journal Title: Jitsugyo no Nihon 實業之日本
 Publisher: Jitsugyo no Nihonsha 實業之日本社
 Year: 1911
 Volume: 14
 Number: 24
 Page: 25-27

物産出色の人物 藤野龜之助

記者足下、昨夜稿を續くべく御約束したが、フト興が湧て、久し振りに呂昇を有樂座に聴いた。昨年来病の爲に四方に客遊し、久しく天樂を耳にすることが出来なかつた。矢張いいね。厭な東京も彼の女の居る間は去りたくないね。そんな事で續きは遂に駄目になつて仕舞つた。容るしてくれ給へ。

山本（条太郎）の話は君の雑誌にも随分よく出る様だから先づ此位にして置いて、最後に三井物産中一種出色の人物を一寸御披露して置かう。それは大阪の（支店長）藤野龜之助だ。

とぼけた彼れの風采

足下、君等の中には彼の面相を見た連中もあるだらう。でぶでぶと肥え太つて、背丈の低い、圓い、頼山陽先生の所謂臍子然たる風采をして居るが、尻の強く出て居る處に、言ふべからざる特色があるよ。赤い、黒い、脂ぎつた顔は、飛出た兩頬によりて頗るとぼけた輪廓を形作つて居るが、其とぼけた處に彼れの特色が隠れたり躍つたりして居る。

一寸説明の出來ぬ特別の色合

彼れの人物も亦彼の容貌の如くに變つて居る。彼れは兎に角三井物産中出色の人物である。少くとも毛色の分らぬ、分らぬではないが、分つて居ても一寸説明の出來ぬ一種特別の色を出して居る男である。

物産の連中には豪傑色とハイカラ色との二大色がある。然らざる者は両者の混合色である。然るに獨り彼れ藤野に至ては全くつらまへ處のない、一種とぼけた色を持って居る。

山本に會て見給え、一たび觸れただけで其人物の色合がすぐ分る筈だ。藤瀬は少し朦朧として居るが、朦朧なりに分る。處が藤野は一寸見ただけでは分らない男だ。とぼけた顔をして居るから、此奴ぼんやりかとも思はれるが、又どこかに此奴食へないと思はせる處もある。大俗の様にも見え、又禪味を帯びた様にも見え、とぼけて居る様にも見え、眞面目な様にも見え、瓢箪にも見え、鯨にも見え、どちらに見てよいか分らぬのが藤野の特色である。それなら底の分らぬ西郷然たる人間かといふに、さうでもない、それなら結局わけの分らぬ下らぬ男かといふにさうでもない。兎に角一寸カタログを見せて、此色合と説明の出來かぬ念の入つた男である。

大阪で見事成功したは彼れ一人

足下、三井物産の各支店中最も商賣の大きな處は大阪である。大阪は我綿絲紡績の中心、其綿絲の對清輸出を三井物産が引受けて居るので、商賣の多いのは固より當然の事である。今回支那の動亂で、綿絲株は大暴落、其海嘯の渦巻く中に立つて居るのが藤野である。

物産の連中に言はせると大阪は實に遣りにくい處だといふがさうだらうよ。大阪の支店は、商賣の駈引に懸けては全國に比ぶ者なき大阪商人が相手だ。東京で随分老巧に立廻る斯道の古狸でも、大阪へ廻はされると、すぐ擔がれる、是まで大阪に行つて一番功名して見やうと手具脛ひいた物産の連中も、大抵は手古摺つた。豪傑でもゆかず、ハイカラでもゆかず、厄介極まる處であつたが、其中で評判のよかつた者は先づ飯田義一人位なもの立派に成功した者は藤野一人だといふ事だ。成程飯田なら遣つたらうと思はれるが、藤野が其飯田でなくば出來ない處を巧く遣つて行く處は是亦中々の豪傑じやないか。

小僧より叩き上げた破格の大将

足下、藤野は小僧上りだよ。三井物産の如き新知識新教育を受けた人材が腕を競ふて居る處で、新時代の學問をせず、小僧から支店長に登り上つた男は先づ山本と藤野位のものだらう。どうしても唯の鼠じやない。

僕はくどくどした事は知らぬ、其邊は君等の詮索にまかす、彼れの立志奮闘はたしかに後進青年の龜鑑となるべきものがあるよ。何でも久しく商店の小僧をして居つて、やがて奮然蹶起瘦腕を揮つて獨立商人と成つた時、非道い目に會つて、四苦八苦の境遇に陥り、遂に三井物産に入つたさうだ。無論下級の位地であつたが、彼れの綿絲綿花に関する知識は最初から既に拔群のものであつたので、直に綿糸の本場たる大阪に送られ累進して遂に支店長になつたのである。方今綿絲に関する知識に於て彼れと太刀打の出來る者は日本に於て幾人もあるまいと思ふ。

仙化、俗化、硬化、軟化何でも自由

彼れの困つた時は眞に食ふや食はずに居た事もあるといふ話だ。さういふ經歷もあるから、世の酸い甘い、舌の根がしびれる程嘗め盡し、こなれて練れて、常識といふ常識はすっかりお手に這入つて仕舞つたのである。俗化でも、仙化でも、軟化でも硬化でも、往く處として可ならざるなしといふのは眞に彼れの謂である。平生は不得要領の様であつて、いざとなれば大に要領を得る。へへーといつて商人笑ひをして居るから、與み易い男かと思ふと、何ぞ圖らん本氣に議論をさせれば辯舌爽快、太刀風のはげしい事大抵の者は吹飛ばされて仕舞うのである。

磯村豊太郎は如何

足下、若夫將來に大なる發展の餘地を有して、近頃めきめきと頭角を顕しはした者は倫敦の磯村（豊太郎）である。磯村は矢張豪傑黨であるが、彼れの豪傑風は年々リファインされて、前途玉成の望を見せて居る。彼れも山本の如く自力に信頼し、強情で、又傲慢の様に見える男であるが、併し努めて鋒鋦を裏み、無闇に人を凌いだり、勝手氣儘に一人で切捲くるといふ遣方ではない。彼れは極めて秩序を重ずる男で、下に對しても、上に對しても秩序を亂す様な事は決してしないから一方から見ると寧ろ慎み深い男に見える。

磯村の眞面目

併し彼れは人に愛せらるゝといふ方ではなく、人に畏れらるゝといふ方である。平生は口數の少ない、しんねりむつつりとした、愛嬌の少ない、どこか不屈の色の現れたる様子をして居るから、最初のクラーク時代には大分損をしたかも知れん。日本銀行を飛出したのも大抵こんな事だらう。併し是れは偶ま彼れが人物の小ならざる處で、又大に頼もしい處で、又將來大に發展の餘地がある處である。彼れは此の特性を少しも摩滅せずして一貫して居るが、彼れ又頗る處世の術を解して居る。交際には頗る努めて居る。近頃倫敦から歸朝した者の話によると、中々評判がよい相だ。

磯村酒間の隠し藝

僕は磯村とは度々一緒に酒を飲んだ事があるよ。酒中々評判がよい相だ。酒酣に耳熟して來ると、彼れは匂の強い葉巻を燻らしながら、冗談やら皮肉やら分らない事を酒氣にまかせて吐き出すが、氣焰萬丈眼中人なきが如しだ。あのしんねりむつつりした男が酒を飲み興に乗ずると『おつちよこちよい』と歌ひ出すから面白いじやないか、モーつついでに素破抜て置くが、更に興が湧て來ると、起き上がつて樽たゝきを遣る。其様子の不恰好といつたら、宛然豚が立つた様、僕は之れを見て、あゝアノ男も高山の大木だ、頼もしいと思ふと同時に、何だかその不恰好が頗る氣に入つたよ、

磯村侮るべからず

粗豪細節に拘はらざる様に見えて實は極めて綿密な處が彼れの身上である。一度會つた人の顔、名の事柄までもよく覚えて居ると彼れに會つた者は皆さういふが、成程記憶力はたしかな男だ。それに數字の操縦が頗る巧みだ。彼れは自から乃公は兩替屋などには逆てもなれぬといつて居るが、中々さうではあるまい。彼れが特に數字に明快なのは暫くでも日本銀行に居た御利益ではないか。彼れは、三井といふ筋を離れても、多くの有力なる先輩友人を持て居る處に餘程強みがある様だ。彼れは慶応義塾の評議員である。三田出身といふ關係から見ても、彼の立場は極て廣い。若し彼れが何か都合で物産を去ることになつても、彼れはどこにでも其脚を立てることが出来る男である。併し彼れは到底三井王国の内閣に入るべき人物である。彼れたるもの豈に輕舉盲動せんや。

足下、いまや藤瀬は上海に在りて親しく動亂の局に當り、山本は本店に在りて對清貿易の大局を統べ、藤野は最も支那に關係多き錦糸の中心地に在り、此三人男は時節柄注目すべき人物であらうと思ふて一寸書いたのである。

足下、明日は僕等の一友が一山する積で漢口へ出懸るよ。君等も一つ見物に出懸けてはどうだ。



New articles in this journal are licensed under a Creative Commons Attribution 3.0 United States License.



This journal is published by the University Library System, University of Pittsburgh as part of its D-Scribe Digital Publishing Program and is cosponsored by the University of Pittsburgh Press.